

取扱注意

平成20年度

外部評価委員による

新潟薬科大学薬学部自己点検・評価表

新潟薬科大学薬学部

はじめに

平成 18 年度から新しく六年制薬学教育がスタートしましたが、本年度は四年制薬学の最後の学生を送り出す節目の年でもありました。一方、少子化と薬科大学・薬学部の新設ラッシュ、さらには将来の薬剤師需給バランスの崩壊予測といった影響を受けて、大学は今まで経験したことのない未曾有の厳しい状況にさらされています。このような状況を乗り越えるために、大学は魅力のある六年制薬学教育を行い、薬剤師として相応しい知識、技量、態度を身に付けた卒業生を社会に送り出すこと、同時にユニークな研究成果を社会に発信すること が最も必要であると認識しています。

薬学部では、平成 18 年度より学外の評価委員による外部評価制度を導入し、教員の日ごろの教育・研究に関する活動状況を評価していただけてきました。厳しい内容のご指摘もありますが、本学薬学部の発展ならびに各教員の活性化に欠かせない有意義なご意見、ご助言であると深く感謝しています。自己点検・評価委員会としましては、外部評価委員の先生方からいただいたご指摘、ご助言、また教員から寄せられた有意義な提言に対して迅速な対応ができるようなシステムを構築していく必要性を痛感しており、次年度への課題としたいと考えています。

教員各自が、“教育力”と“研究力”の両面に一層の自己研鑽をすることで、大学全体としての高い評価につながることを期待しています。

平成 21 年 4 月

薬学部自己点検・評価委員会

薬学部自己点検・評価委員会

委員長	北川 幸己 教授（学部長）
委員	長友 孝文 教授
委員	上野 和行 教授
委員	杉原多公通 教授
委員	鍋倉 智裕 准教授
委員	田辺 顕子 准教授
委員	山口 利男 助教

目 次

I.	外部評価の日程	1
II.	外部評価委員による総評及びコメント	4
III.	教員個人の活動に関する評価	13
IV.	各委員会の活動に対する評価	38
V.	教員による提言（平成19年度）のまとめ	51

外部評価の日程

平成20年度外部評価日程表

(平成19年度自己点検分)

1 外部評価者

- ① 松木 則夫 (東京大学教授)
- ② 廣部 雅昭 (静岡県学術教育政策顧問)
- ③ 本多 利雄 (星薬科大学教授)

2 評価日程

- ・外部評価委員到着

平成21年2月13日 (金) 午後1時30分

- ・外部評価員と主要委員会委員長との意見交換会 (会議室1)

午後2時～午後3時30分

- ・外部評価員による講評 (全教職員出席) (J201講義室)

午後3時45分～午後4時45分

- ・懇親会 (薫風亭)

午後6時30分～

3 被評価者

委員会名等	平成19年度	平成20年度
学長	山崎 幹夫	山崎 幹夫
学部長	長友 孝文	北川 幸己
将来計画	長友 孝文	北川 幸己
予算	長友 孝文	北川 幸己
自己点検・評価	長友 孝文	北川 幸己
教務	杉原 多公通	杉原 多公通
学生	中村 辰之介	尾崎 昌宣
入試	小宮山 忠純	中村 辰之介
国試	上野 和行	藤原 英俊
就職	若林 広行	若林 広行
図書	大野 智	大野 智
機器	北川 幸己	大和 進
国際交流	河野 健治	小宮山 忠純
臨床実務教育	若林 広行	若林 広行
防災・環境	佐々木 正憲	佐々木 正憲
公開講座	大和 進	渡邊 賢一
広報	高橋 努	山崎 幹夫
C B T	藤原 英俊	藤原 英俊
薬学教育研究センター	杉原 多公通	藤原 英俊

委員会名等	平成 19 年度	平成 20 年度
薬用植物園	白崎 仁	白崎 仁
遺伝子実験施設	小宮山 忠純	小宮山 忠純
実験動物施設	尾崎 昌宣	尾崎 昌宣
体育施設管理運営	高橋 努	高橋 努
放射線安全管理	安藤 昌幸	安藤 昌幸
ホームページ	中村 辰之介	中村 辰之介
大学院教務	上野 和行	大和 進

事務

鈴木 正利（事務部長代理）

茂木 弘邦（庶務課長）

太田 卓馬（学生課長）

生野 昭雄（教務課長）

大井 宰（入試広報課長）

星野 要子（庶務係長）

オブザーバー

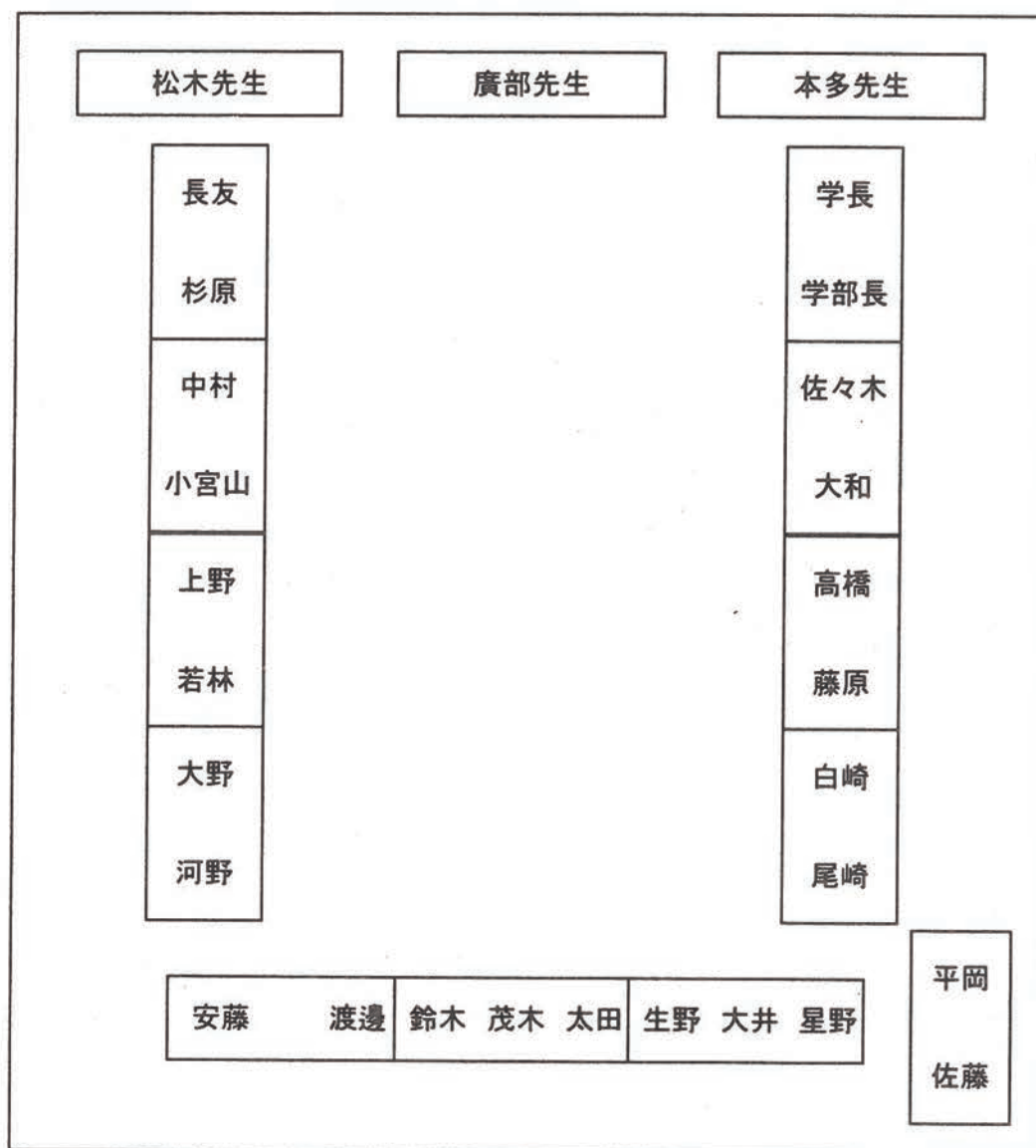
平岡 昇

佐藤 真治

4 座席配置図

別紙

平成20年度外部評価座席配置図



外部評価委員による総評

薬剤師教育が6年制教育になり、また主に創薬関係従事者を目指した4年制学科の並列も薬学部認められて薬学教育が大きな変革期を迎えたことは記憶に新しい。6年制学科の学生も平成21年4月にはいよいよ4年次へと進学することからC B TやO S C Eを間近に控え、6年制薬学教育においてはカリキュラム整備を筆頭とする最終年度までの諸制度の確立が急務になっている。

一方、18歳受験年齢層人口の減少と薬学部の新設ラッシュで私立大学薬学部の受験者数は著しい低下現象にある。特に地方大学においてこの傾向が強く現れている。

このような厳しい状況下において新潟薬科大学はさらなる飛躍を目指し、大学基準協会の大学評価を受けて2008年に認定されたことは英断であり、外部評価を率先して導入したことにも敬意を表したい。本協会の大学評価は、社会に対し大学の質を保証するものであり、新潟薬科大学が真の大学として社会に認知されたことになる。

最近、文科省より大学設置基準の一部改正の連絡があった。その中には、「教育研究上の目的の明確化」「成績評価基準等の明示等」「教育内容等の改善のための組織的研修」が挙げられており学則変更が必要になろう。大学としてどのような人材を育成・輩出するかの理念を教職員全員が共有し、そのために教職員はどのように自己向上を図るか常に考えなければならないようになってきた。昨年の評価でも触れたように、教員は言うに及ばず、事務系職員各自の能力向上も教育研究向上においては大きな要因になるであろう。

さて、教育制度が変更になると色々な面で新たな資金が必要になるが、そのためには外部資金の導入を積極的に行う必要がある。特に研究経費については、大学に依存するばかりでなく外部資金の導入を食欲に行うよう尽力すべきである。科研費の採択数は申請数に関連することから、全教員が積極的に申請する姿勢を示さなければならない。本年度は確かにその意欲はうかがわれるが、まだ十分とはいいがたく、今後もさらなる努力を続ける必要があろう。近年、研究者の評価基準が外部資金の導入寄与に依存するようになってきている。新潟薬科大学の研究費においては無駄を省き、誰もが納得する方法での資金の傾斜配分を試みているが、これは大きな前進である。教育と研究は社会に認知された高度な薬剤師教育にとって両輪であり、決してどちらも疎かにしてはいけないものである。

6年制の学生においては「社会で認知される高度な薬剤師」の育成が望まれている。「問題提起能力、解決能力、生涯学習能力、思考力、洞察力、遂行力、集中力等々」の能力を身につけた薬剤師の養成は研究を通して培うのが理想的であり、そのためのカリキュラム作りが早急に望まれる。極論になるかもしれないが、各薬科大学の特徴は5、6年次のカリキュラムに現れるであろう。

一方、6年制の上に立つ大学院の設置基準が近い将来文科省より示されるであろう。

そのための大学側の人的およびハード面での整備も要求されることと思う。この大学院がどのような研究を志向するかは今後示される基準に左右されるであろうが、全ての基礎研究内容を否定されることは無いであろう。薬剤師教育は薬学部の identity を示すものであるが、大学においては研究面も決して疎かにしてはいけないと信じる。

また、6年制の学生の国家試験関連事項においてはC B Tの実施がすぐ目前に迫ってきている。合格点数も問題の内容を加味すると低い基準とは言いがたい。少なくともC B Tは受験生の全員合格を目指すものと思うが、そのために知識の詰め込み方の教育にならないような配慮がほしい。教育方法・手段等において教務委員会を中心とした効率化が望まれる。O S C Eについては施設の整備とその後のトライアルも終わり順調に推移していると思うが、その後の実務実習先の確保については数の問題だけでなく、質に関する問題も勘案し学生への配慮がなされることを期待する。

学生にとって魅力のある薬科大学は国家試験の合格率が良いというだけでなく、将来の方向性もある程度確約される大学ということが言われている。平成20年の「東洋経済」における就職に強い大学の就職率ランキングでも上位100大学中14校が薬系であった。したがって薬学部の人気が増大し、偏差値が上がり新設大学が急増したことは記憶に新しい。しかしながらその結果、薬系大学の過当競争につながり、ひいては学生の質の低下をきたしているのも事実である。受験人口の減少もあり、受験生あるいは入学生の減少は、薬系大学の定員の削減にまで繋がってきている。このような傾向は特に地方において顕著である。新潟薬科大学が社会で認知され信頼される薬剤師あるいは社会で必要とされる薬学士を育成し輩出できなければ、学生確保も困難になろう。逆にそのような人材を絶え間なく送り出すことが出来れば確固たる地位を築けよう。薬系大学にとって今は危機であると同時に、他と差別化できるチャンスと捉えることが出来るかもしれない。現在の状況下では入学生の確保にも多くの労力が必要とされるのは事実であるが、教職員全員の一致団結した協力で前進することを期待しています。

最後に、議論や討論は教授会等で大に行い、互いの意見や信念をぶつけ合えばよい。異なった立場や見方がそれぞれにあり、貴重な意見がそこでは披露され、かつ真剣な議論の中からさらに優れた考えが創り出されるものと思う。大切なことは、異なった意見であっても全員が大学発展のために発言しているという、相手を尊重する気持ちであろう。今の時期に大事なものは教職員の和である。一度コンセンサスを得た結論に関しては、たとえそれが己と異なった考えであっても不満をためておくことなく、全員協力体制をとらなければ何事も進展しないであろう。自己をよりよく活かすには、組織をより強くすることが早道である。「評価・点検」が改善のために現実に行動に移されて、大学の進むべき方向を決める指針の一助になれば幸いである。

教学に関連する項目ごとの評価

今回の評価においては、教学に関連することのみとし、純粋な経営等に関しては評価外とした。

1) 経営と教学について

経営は理事長を長とする理事会が、また教学は学長を長とする教授会が責任を持って運営にあたるのが望ましい姿ではあるが、現代の変化の激しい時期には決断と行動において迅速性が求められる場合が多々ある。理事会及び教授会共にこのような状況を踏まえて、良識ある姿勢でこれからの課題に前進的に対処することが求められる。

2) 財務と運営資金について

私立薬科大学においては、全予算における教育研究経費の占めるウェートがかなりの率になっている。質の高い内容に富む教育研究を行うにはこの経費は極めて重要であるが、現状を考慮するに、大学だけに資金を頼ることは不可能であり、やはり外部資金の導入を積極的に行う必要があるだろう。無駄を省き効率化に勤めるための各研究室での独自の努力はもちろんのこと、科研費の申請のみに止まらず学内でのコンセンサスを得た大型プロジェクトなどの申請も考慮する必要があると思われる。J S T事業や産官学連携推進センター事業などの展開は素晴らしいことである。

一方、実務実習教員の補充による人件費の拡大は私立薬科大学の共通の悩みである。大学の建学の精神、理念に沿った学生を教育するには十分な教員数が求められるが、人手不足を理由に教育研究面で手を抜くことは許されない。学内での徹底した議論に基づいた効率的な教育方法の確立が望まれる。

3) 学則・カリキュラムについて

文科省からの大学設置基準の一部改正の通達に従って学則変更を要する。

カリキュラムについては、学部は「薬学教育モデルコアカリキュラム」に沿って構築されており、表面上はバランス良く配置されており特に問題は見られない。新制度の学生も、いよいよC B TやO S C Eが実施される年次になってきた。今後はほとんどの学生がこれらをパスするような「結果と内容の伴う授業」が求められるであろう。また、5及び6年次でのアドバンストコース教育は国家試験に向けての再度の基礎分野教育に時間をとられることが予想される。これも踏まえてこの年次のカリキュラムを見直すことも必要になってくるのではないだろうか。

大学院については、文科省の指針がいまだに提出されず予定が大幅に遅れているが、これもいずれ近いうちと予測されるため、早急に制度を構築する準備だけはしておく必要があるだろう。

4) 学生に関する事項全般について

私立薬科大学における一番の重要課題は質の高い学生を如何に確保することが

出来るかである。質の高い学生の確保は国家試験合格率の上昇にも繋がり、ひいては就職等にも有利に働くと考えられる。質の高い学生の確保は受験者数に比例することは自明の理である。従って受験者をどのように確保するかが重要な問題である。近年の薬学受験の動向は都市型志向が強く現れ、地方大学の疲弊が見られる。しかしながら福井高専の例に見られるような特色が出せれば地方大学の良さが逆に出せるかもしれない。新潟薬科大学には薬学部のみならず応用生命科学部も存在することから、それぞれの学部の特色をハイブリッドし地の利を活かした活動をするように教職員全員で考案してほしい。

平成20年度は薬剤師の国家試験合格者が1万人を超えた。平成21年度より医学部の定員が増えることが決定しているが、それでも医師は年間8千人強である。薬剤師のバブル時代が到来するといわれても仕方の無いところである。このような状況下、如何に社会に認知される薬剤師を輩出するかが大学の評価になるであろう。幸いにも新潟薬科大学は地域での就職が抜群に強い。これはとりもなおさず卒業生が地域密着型の薬剤師として活躍していることを意味している。この事実を基盤として大学を発信源とする新潟発のネットワークを構築し地域への貢献と共に、近隣へ普及していけば少しずつでも受験生に対する効果が現れる可能性もあろう。

一方、近年の学生は表面とは裏腹に内面的に非常にもろいところが見られるので教職員そろっての親身になったケアが必須である。

新制度の学生が4年生となる平成21年度はCBTやOSCEが目前である。私立薬科大学の宿命として、これらの試験の合格率は将来の大学の存在をも左右しかねない重要な結果になる。小手先だけの手段を講じることは決して望むべきことではないが、そのための対策を考慮しておくことは必要であろう。また、実際の卒業時での国家試験対処法として、4年次までの授業で忘れられつつある基礎科目の知識を呼び起こすための対策を5及び6年次において講じる必要も出てこよう。

5) 教員の教育研究等について

未だ混沌とした感のある薬学教育内容であり、国家試験というハードルを越えなければならぬ学生教育においては効率的な教育方法が必要であり、教員が各専門に分かれて業務に専念するようになるのは仕方の無いことでもある。しかしながら、どの業務においても上下関係は無く、全員が均等に教育に携わっているという意識の共有は必要である。

研究を行うためには大学からのサポートあるいは外部からの導入等による資金が必要である。そのような資金を基に行って得た結果は公表する義務がある。論文の質と数はもちろん大事であるが、教員として最も大事なことは真剣に真実解明に向かって努力している姿を教員自らが学生に示すことにあると考えている。その結果、教員は研究を通して学生を教育することが可能となる。研究は教育の基盤となるものであるが、教育をないがしろにするものではない。

また、学生も研究を通して「思考力、遂行力の養成」「問題提起能力、問題解決能力の養成」「論理性の確立」「整合性の理解」「責任体制の確立」等を身に付けることができるであろう。

今後益々厳しくなることが予測される研究環境ではあるが、社会で評価される学生を輩出するためにも教員のさらなる努力が望まれるようになろう。

教員の任期制導入も将来の重要検討事項になろうが、必ずしもプラスの面ばかりとは限らず慎重な議論と対応が必要と思われる。

6) 施設・設備等について

薬科大学として一通りの施設・設備は揃っており、教育研究に支障をきたすことはないであろう。図書館の開館時間も長く、良く考慮されており学生の勉学に配慮されたものとなっている。外部にも開かれた大学という印象も強い。

ホームページもかなり充実されてきているが、研究室間で差異が認められる。一定の基準を保って作成してもらうのも更なる充実の一方法となるであろう。

受験生がホームページを見る確率はかなり高くなっている。ホームページの充実は受験生確保においても重要である。

また、これまでも提案していることであるが、機器の保守管理に関しては受益者負担の原理原則を働かせることが必要となろう。

薬草園についても活発な活動が伺える。

7) 各種委員会について

各種委員会はそれぞれ立場に立った視点から独自の努力をされているが、形となって表れてきていないものも見られ今後の検討課題である。

大学の方針を決定する上で将来計画は最も重要な課題である。外部評価や教員の提言等参考にした改善策がここから提案され、かつ実施されると良い。

自己点検評価は外部評価の導入など積極的に行われており大学の英断に敬意を表する。

教務関係の業務は私立薬科大学では将来の命運を左右する業務といっても過言ではない。日常の学生関連事項はほとんどが教務関連になる。新制度の学生が4年次に進学する本年から、この委員会は益々多忙を極めることが予想される。従って、教員間における業務負担の偏りには配慮が必要である。

国試委員会やC B T委員会は教務委員会及び教育研究センターと綿密な打ち合わせの基に、一元化した教育システムを構築することが効率的な教育を生み出すのではないのでしょうか。また、近い将来、臨床実務教育委員会との連携も必須になると予測される。現制度の改廃を伴うが、全てを包括する新しい教育センター構想も一考の価値があるのではないかとと思われる。

最後に学生の進路指導は受験生確保と同等あるいはそれ以上に大学にとって重要な課題である。現在、薬学部出身者の就職は全国的に良好であるが、これは実質

的に医療の現場、特に薬局で働く薬剤師不足から来ている。しかしながら近い将来の到来が予想される薬剤師バブル時代にいつまでも今の状況が続くことはありえない。今のうちから着実な実績を残すべく大学一丸となって優れた就職先確保に力を注ぐ必要があるだろう。

生命と健康をみつめる「新潟薬科大学」の7つの特長を活かして、今後益々発展するためにも教職員一丸となった協力体制の確立がますます重要になってくるであろう。

新潟薬科大学外部評価コメント（質問含む）

- ◎ 教員の自己点検票に基づく評価；あくまでも個人の申告に基づくデータの範囲で、十分実情を知らない外部の人間による評価である。→大転換期にある薬学教育事情のもとで、“悩みながら”も教育、研究に真摯に努力している姿が見られ、大変好感が持てた。個々にはすべてコメントをつけて評価したが、評価の基準は主観的であり、あくまでも今後の努力に向けての参考意見として捉えていただきたい。
- ◎ 委員会活動実績：本年度、各種委員会活動実績を評価の対象としているが、現在新制度への対応もあって委員会の数が多いように感じられる。いずれ統廃合によって整理されることが期待される。委員会の委員数が概して少数で全学の意思を反映しうるか懸念される。決して多ければ良いということではないが、委員会の性格にもよるがそれぞれ適正規模があると考えられる。もちろん委員の負担との絡みもあるが。各委員会の評価についてはそれぞれコメントした。
- 本学は薬学部と応用生命科学部の2学部から構成され、産業界との連携体制も出来ている。薬と食との融合は（混合ではなく）ユニークで期待される新しい研究分野を創出する可能性が高いが（静岡県立大のCOE、G-COEの例）それを意図した具体的取組、成果はなにか。
- 薬学部と応用生命科学部との関係は⇔東京薬科大学の薬学部と生命科学部との関係と同じか。⇔独立採算制か⇔設立経過を含め両大学の異同状況について⇔両学部の研究・教育上の連携・協力関係は？
- 中小規模の(単科)大学のような場合、教員の役割分担が過重になりやすい。研究、教育、運営、経営等それぞれにおける負担の分担あるいは軽減を行う必要がある。実態と展望その具体的方策について。
- 授業担当コマ数が教科によってかなり差異があるが、実働時間とどのように関係するのか。また評価という視点からはどのように調整あるいは補償されるのか。
- 薬学6年制教育の理念と将来展望が必ずしも明確でないために、当事者（教員、学生をふくむ広く関係者）の間で、確信をもって教育、研究を推進できない悩みが感じられる。→十分理解できる。試行錯誤の中で軌道修正することは必要→未熟な方針をかたくなに守る姿勢よりは、状況に応じて柔軟に洞察力を働かせ軌道修正することが少なくとも10年間は必要→4年制履修者（薬科学）、2種の大学院、学位の扱いなど確立していない問題は山積している。⇔全薬系大学共通の課題

- 研究と教育は表裏一体→相互にフィードバックすることによって質の高い独特な研究・教育が可能になる。→ハイレベルの内容を分かり易く話すスキルは教育の原点→必須教育の内容の本質を理解する過程から、新しい研究の発想が生まれることは多い。
- 理想的薬剤師像、質の高い薬剤師教育とは→従来の薬剤師の役割、薬剤師教育から“演繹”的に導いてはならない。多くの識者、研究・教育当事者、医療従事者（薬剤師含む）から自由闊達な前向きな意見を聴取し、“帰納”的に導き出すべきである。→その意味では、教員各位からの真摯な提言は現場からの切実な声として貴重である。それ以外にも教員各位からの提言は、大学の実情、将来展望、“悩み”を知る上で有益である。学生の声も別の視点からも同様重要である。
- 問題解決型の薬剤師に求められる“研究者マインド”とは→医療の現場では「薬」を巡り様々な問題が起こり、薬剤師が責任をもって衝にあたることになる（当てにされないならそれ自体が問題）。その際、特に「未知」の問題に対し、解決の道を「基礎知識」の中に求めることが出来るか。「役立つ基礎知識」とそれを活用できる「応用力」との間を常に相互フィードバック出来ることを「研究者マインド」と定義。これは薬剤師に限らず全ての研究者に必要な資質であるが、根底には好奇心と探究心が存在する。このような研究者マインドを涵養する教育がなされるべきである。
- 入学者数の増加策→就学人口が減少している現実の中で、各大学が学生（受験生）を“奪い合う”という発想から転換する必要がある。教育の質の転換（個性化等）⇔入学定員の削減による適正な競争率維持（受験生の勉学向上心と緊張感を高めることで質の低下を避ける）⇔ベビーブームの時期に、入学定員の“臨時増”と教員・施設の拡充があったという歴史的事実の再認識⇔就学学生数の減は“臨時減”の措置があって本来当然⇔少人数教育、社会人リカレント教育の実現という視点も重要（教育の理想）⇔それに見合う経営戦略の構築は必要→全国大学と文科省を始めとする教育行政担当者の意識改革が必須→これは全ての大学が一斉に取り組まない限りは無理な注文かも知れない。“奪い合い”という生き残りをかけた競争原理を働かせることが大学発展のドライビングフォースになることもあるが。
- 外部評価のあり方
自己評価委員会での内部評価結果をうけて、外部評価を行うべきではないか。大学基準協会の認証評価（第三者評価）と外部評価との関係は？
法人化された国公立大学の場合（文科省の法人評価委員会が行うが、その中で教育・研究の評価は大学評価・学位授与機構に委嘱）は参考になるか。⇔中期目標→中期計画→達成目標設定→達成状況を評価（大学間の相対評価ではない）

- 県内大学との連携協力関係は→静岡県の例→国公立全大学が「大学ネットワーク 静岡」を形成、県が財政的支援（COE を目指す個人を対象とした研究助成：SOE (Seeds Of Excellence)、講演会助成等を行っている）→図書館の共同利用、人材バンクをつくり教養教育の講師の相互派遣等提案中）⇔連携と競合のバランスに注意（相互にメリットがあること）

その他気づいたこと

- 助教など若手研究者が大学運営の役割や負担増のため、留学体験が難しくなっていることは確かに問題である。
- “理想的薬剤師教育”が薬剤師国家試験の合格率向上に繋がらないとすれば、「試験」か「教育」どちらかに問題がある。“受験技術”は本来「資格試験」には不要。
- 教育、研究、社会貢献等実績の評価は、職階により基準・観点を広く捉える必要がある。

以上

平成 21 年 2 月 13 日

外部評価委員 廣部雅昭

資料 1

教員個人に対する評価

資料 2

各種委員会に対する評価

委員会名	将来計画委員会	委員名	◎ 長友孝文、杉原多公通、中村辰之介、小宮山忠純、上野和行、北川幸己（理事）
① 年間の活動 評価委員による評価点 （ 3、3、3 ） 〔コメント〕 ● 「活動」においては、人事や将来計画等の重要事項が多いためと考えられるが、具体的な記述が無く、評価が難しい。昨年の外部評価を参考にして、改善すべきところや提言等の取捨選択を本委員会で行っても良かったのではないかと。評価意見を迅速に実行に移行できるのも本委員会の利点かと思う。教育研究においては、C B TやO S C Eのみならず、大学院の設置計画等も本委員会の議題と思うがいかがであらうか。 ● 新しい薬学教育・研究に対する大学としての基本理念を明確にした上で、短期・中期、長期計画をたてなければならないが、実績報告書の中ではその姿が見えない。			

委員会名	予算委員会	委員名	◎長友孝文、杉原多公通、中村辰之介、小宮山忠純、上野和行、北川幸己（理事）
① 年間の活動 評価委員による評価点 （ 4、3、5 ） 〔コメント〕 ● 通常予算の配分のほかに、新潟薬科大学薬学部教育・研究助成金制度を制定したのは英断である。大学や科研費等の公な研究費を使って研究を行ったのであれば、研究者はその成果を公表する義務がある。上記助成金制度で得た成果も大学紀要などに公表され、そのフィードバック機構を確立しておけば有効な使い方が期待できるであろう。全教員が納得する制度作りは時間がかかると思われるが、制定されたものに対する周知を徹底すれば良いのではないのでしょうか。 ● 評価に基づく教育・研究助成金の配分は教員のインセンティブを高めるためには、有効であるが、使途はなにか。金額的に助成の趣旨は生かされているか。外部資金獲得実績を評価対象とするケースが最近が多いが。 ● 教育・研究補助金のシステムを制定し、実施したことは高く評価される。			

委員会名	自己点検・評価委員会	委員名	◎ 長友孝文、小宮山忠純、上野和行、 田辺顕子、山口利男
① 年間の活動 評価委員による評価点 (4、4、3) [コメント] ● 平成20年度より、文科省の大学設置基準変更で「教育研究上の目的の明確化」、「成績評価基準等の明示等」と並びFDは大学および大学院の学則として明記することが義務付けられている。活動報告にあるような今後の課題を早急に検討し、実行に移すべき時期にさしかかっていると思う。また、自己点検・評価は評価事項に対してどのような対処・改善が行われたかの応答があって初めて機能するものである。そのための体制を確立することが重要である。 ● 外部評価（第三者評価とは本来意味が異なるが）は重要であるが、教員の自己点検・評価に基づき、学内の事情を熟知している学長以下幹部教員からなる学内評価委員会による「内部評価」を先ず行った上で、“内部評価の妥当性”を含めた外部評価を行うのが一般的ではないだろうか。 “資料丸投げ”で、必ずしも状況を把握していない外部評価委員に評価を委ねることには多少無理があるように感じる。 ● 自己点検評価票には優れた提言が多く書かれている。これらの提言を審議・実行するシステムを是非つくっていただきたい。また、その結果を提言者にフィード・バックしていただきたい。			

委員会名	教務委員会	委員名	◎ 杉原多公通、中村辰之介、渡邊賢一、尾崎昌宣、星名賢之助、朝倉俊成、武久智一、佐藤浩二、
① 年間の活動 評価委員による評価点 (5、5、5) [コメント] ● 昨年の評価でも言及したが、本委員会は多くのルーチンワークを含んでいながら単科の私立薬科大学の命運を握っている極めて重要な委員会である。直接あるいは間接的に入学から卒業就職までの学生に関するほとんど全ての事項に関与しているといっても過言ではない。活動報告に記載された、本年度に実現させた、あるいは検討した事項はどれも素晴らしいことであるが、本年4月から4年次に進学する6年制学生のプレ実習や実務実習、さらにはCBTやOSCE等早急に処理しなければならない問題がまだまだ山積している。本委員会の苦労は尽きないかと思うが、益々の活躍を期待している。他学部から薬学部への転部に関しては、実務実習の定員の関係もあるので細心の検討が必要であろう。また、コアカリキュラムに関しては重複もかなりあるので、効率の良い内容にするための見直しが必要になるだろう。 ● 教務委員会は大学教育の生命線である。さまざまな試みが行われており、苦労の程が窺われるが、その取組と努力を高く評価したい。高大連携は“学生集め”には有効かも知れないが、			

双方にそれだけのゆとりが本来あるのか。高校側にもっと基礎学力をつけさせる教育を要請すべきではないのか…と思う。

- 教務全般の問題を良く把握し、議論されていると思います。自己点検評価票に記載されている提言についても議論されてはいかがでしょうか。

委員会名	学生委員会	委員名	◎ 中村辰之介、飯村菜穂子、酒巻利行、 高津徳行、福原正博、本澤忍
① 年間の活動		評価委員による評価点 (3、4、4)	
〔コメント〕			
● 学生生活全般を取り仕切る委員会であり、近年の学園生活を考慮すると心配事項が絶えないであろう。大都市圏における有名大学では麻薬等の問題が大きく取り上げられているが、薬科大学で同様なことが起こると大学の命取りになりかねない。既にHPでも大々的に呼びかけがあったが、禁煙や飲酒も含めて大学全体で意識を高める必要がある。また、地域と融合した大学として地域に配慮した施策は大切であるし、学生生活に関してHPを充実することは入学生確保においても必須である。 ● 今は学生は“お客様”であり、満足度の高いキャンパスライフを提供しなければならないが、自主的活動を支援するというスタンスが大切で、受動的な学生をつくることではない。コミュニケーションを良くし、共に考える姿勢で臨むことが肝要である。 ● 問題点を的確に把握され活動されているようなので、引き続きこの活動を続けられることを期待します。			

委員会名	入試委員会	委員名	◎ 小宮山忠純、宇田裕、白崎仁、 本多政宣、鍋倉智裕
① 年間の活動 評価委員による評価点 (3、4、3) [コメント] ● 私立薬科大学における入学志願者の減少は全国的な傾向である。これが学生の質の低下にも繋がっている。良い学生を確保するには多くの受験生を集めれば良い理屈であるが、その方策が具体化していないのは残念である。入試制度も考え合わせて本委員会として実行可能な案を提示し、全員で検討する必要があるだろう。 ● 入試は学生の獲得にとっては最も直接的で重要な役割を果たす。理想は全国各地から入学者が集まることであるが、現実には地域（県内）からの志願者を確実に獲得することである。不況下で学生も地元指向になっている。地域に根ざした大学の特徴（産学連携など）を広報活動を通じ周知することが必要。県内特別推薦枠を拡大することも考慮すべき。			

委員会名	国試委員会	委員名	◎ 上野和行、尾崎昌宣、影向範昭、 酒巻利行、本澤忍、飯村菜穂子
① 年間の活動 評価委員による評価点 (3、4、4) [コメント] ● 学内事情によるのであろうが、本委員会に薬学教育研究センターが関与していないように見える。国家試験関係全般および成績下位者に対する教育は教育研究センターが主体となって責任を持って行うのが当然であり、それ故に教育研究センターの意義もあるように思える。6年制に対応したC B Tや国家試験については、当該センターとの連携が必須であると思われる。本委員会の目的が明確でない。 ● 国試は薬系大学の最大の関門で、避けて通れない現実である。合格率を高めるため種々の方策を考えることは蓋し当然といわねばならない。しかし理想的薬剤師教育を行うことが合格率を低下させることには決してならないという実績を自信をもって示して欲しい。			

委員会名	就職委員会	委員名	◎若林広行、宇田裕、高中紘一郎
① 年間の活動 評価委員による評価点 (3、4、4) 〔コメント〕 ● 薬剤師としての就職はここ数年はまだ順調であろう。しかし学生のためには、10年後を見据えた就職活動を今のうちにしておく必要がある。問題提起欄にある提案は私立薬科大学ですでに始めている内容でもある。薬局や病院等の医療現場への就職は順調であるが、大学院修了者においてもメーカーへの就職が極めて少ないのは学生の希望によるものなのか。大学として、組織だった就職支援システムの構築が重要になってくるであろう。 ● 就職状況は好調のようであり、これまでの就職委員会活動が機能していたものと評価するが、6年制導入以後の就職はこれからの未知の問題である。問題提起の中にあるようなキャリア支援センターの設置と就職指導は必要であろう。			

委員会名	図書委員会	委員名	◎大野智、藤原英俊、星名賢之助
① 年間の活動 評価委員による評価点 (3、4、3) 〔コメント〕 ● 経費削減のもっとも大きなターゲットが図書費であろう。特に近年のジャーナル経費は急騰しており、購入打ち切りが多く大学で見られるが、ここでは新規購入が出来るのは恵まれていると思える。図書は大学における教育研究のバロメーターでありながら、現状の維持すら難しくなっている実情である。問題点は将来検討すべき事項を含んでいる。 ● 電子ジャーナルの購入を近隣他大学と共同で行う方式は現在一般的になっている。また大学間ネットワークを形成し、図書館の相互利用を行っているところも多い。			

委員会名	機器委員会、共同利用 機器施設運営委員会	委員名	◎北川幸己、安藤昌幸、大貫敏男
① 年間の活動 評価委員による評価点 (4、4、3) [コメント] ● 機器に関しては特に大きな問題は無いようである。引き続き活発な利用が望まれる。昨年も指摘したように、受益者負担の原則を速めに導入したほうが良い。実験動物施設の利用規定と共に考える必要があろうと思う。 ● どの大学も同じ悩みを抱えている問題である。進歩の早い機器類のレンタル方式も考えられるが、なかなか現実にはメリットが少ないようである。			

委員会名	国際交流委員会	委員名	◎河野健治、鍋倉智裕、酒巻利行
① 年間の活動 評価委員による評価点 (2、3、3) [コメント] ● 現代の多くの大学活動で本委員会は重要な位置を占めている。薬剤師もグローバル化が叫ばれている現在、海外との交流は積極的に行うべきであろう。また、結果はHP等で大いに宣伝すべきと考える。ここでは、大学院生として比較的多くの外国人の名前が見受けられるが、彼らに対する支援体制は確立しているのでしょうか。教員や学生の交流を考慮して海外との姉妹校締結を増やしても良いであろうし、実際の行動が足りない印象がある。世界に開かれた大学のイメージ作りに今少しは力を入れても良いと感じる。 ● 実のある国際交流を行って欲しい。提携だけして休眠状態になっている数だけの国際交流も現実には多い。留学生の受け入れ問題などで課題が多いことも確かである。			

委員会名	臨床実務教育委員会	委員名	◎ 若林広行、上野和行、河野健治、 渡邊賢一、影向範昭、朝倉俊成、 長友孝文、杉原多公通、中村辰之介
① 年間の活動 評価委員による評価点（ 4、4、4 ） 〔コメント〕 ● 6年制学生が4年次に進学し、実務実習もそれほど遠くない将来にスタートする。それまでに病院と薬局の実習先確保が必須であるが、数だけを確認すれば良い訳ではない。実習先で教育内容が大きく変わることの無いような学生への配慮も必要になろう。本委員会のこれからの益々の活躍が期待される。 ● 実務実習がよく行われていると努力を評価したい。その成果を十分検証し、提起されている問題点への対応を、受け入れ先との関係もあるので、本委員会が中心となって早急に行う必要がある。			

委員会名	防災・環境委員会	委員名	◎佐々木正憲、土橋洋史、関川由美
① 年間の活動 評価委員による評価点（ 2、3、2 ） 〔コメント〕 ● 重要な活動は無いようですので評価が出来ない。実験に伴って必要とされる環境整備は地域と協力して行う必要があるのではないのでしょうか。特に実験器具や溶媒、医療器具等の廃棄物に関しては厳しい規制があると思いますが。 ● 環境問題は、今後益々重要になる。教育のテーマとしてカリキュラムの中に取り入れるべきである。 ● 提示された資料からは積極的な活動を窺い知ることはできませんでした。			

委員会名	公開講座委員会	委員名	◎大和進、皆川信子、山口利男
① 年間の活動 評価委員による評価点 (3、4、4) [コメント] ● 創立30周年記念事業を成功裡に終えたことは素晴らしいことである。題材は薬に限らずとも、地域との連携を図った企画があっても良いと感じます。大学を地域の人に良く知ってもらうことは入学者確保だけでなくイメージアップにおいても重要なことと思います。 ● 薬大セミナー31件の実態が不明であるが、学外公開か？ 最も有効な大学広報活動の一つとなる。学内教員が行うならば費用はかからない。テーマの選定が重要。			

委員会名	広報委員会	委員名	◎高橋努、中村辰之介、中川沙織
① 年間の活動 評価委員による評価点 (4、4、4) [コメント] ● 活発に活動しているように見受けられます。受験者確保に関してオープンキャンパスは有効な手段と思います。このとき、院生等に協力してもらい大学の印象を高めるようにしたら良いでしょう。現代の広報ではHPの充実が極めて大切なことと思いますので専門家と少し検討してみたら如何でしょうか。 ● ホームページを最大限活用し、ネットによる新しい情報の提供を頻繁に行うことが先ず必要であろう。ホームページ委員会との連携協力、相補的役割分担を円滑に進めることが肝要。			

委員会名	CBT 委員会	委員名	◎ 藤原英俊、佐々木正憲、高津徳行、 浅田真一
① 年間の活動 評価委員による評価点 (4、4、3) [コメント] ● 好む好まざるとにかかわらず C B T は薬学生にとって必須であることから必要な施設設備は早急に整備しなければならない。本委員会はハード面に関する委員会に見受けられるが、薬学教育研究センターを兼任している教員が多いことから、教育内容に関する検討もあわせて行ったほうが効率は良いように思う。C B T もトライアルから想像すると、学生にとってはハードルが少々高く感じられそうである。事前の万全の準備が必要であろう。 ● 特になし。			

委員会名	薬学教育研究 センター	委員名	◎ 杉原多公通、佐々木正憲、藤原英俊 土橋洋史、高津徳行
① 年間の活動 評価委員による評価点 (5、4、5) [コメント] ● きめ細かい対応がなされており活発に活動している。国試対策委員会との関連が明確でないため、多少の混乱が生じているように見受けられる。問題提起欄に、卒業延期生や成績下位者は国試対策委員会で、本センターは「より効果的な教育手段の開発・研究」にシフトすべきとあるが、卒業延期生や成績下位者にも本センターが積極的に関与したほうが適切であろう。今後6年制学生の C B T 問題などを含め、国試関連事項をまとめて統括する姿勢が期待される。システムの一本化により、本センターが主導権をもって活動しやすくなるであろう。 ● 現在は未だ試行錯誤の段階であろうが、本来の趣旨を常に想起しながら推進することが必要である。 ● しっかりした教育が計画的になされていると思われる。			

委員会名	薬用植物園運営 委員会	委員名	◎ 白崎仁、池城安正、武久智一、 一柳孝司
① 年間の活動 評価委員による評価点 (4、4、4) [コメント] ● 薬用植物園は薬科大学では地域のシンボリック存在でもある。地域住民への定期的な見学会は地域に開かれた大学として大切な行事の一つです。見学者が高年齢層に偏る傾向があると思うが、高校生や中学生を対象とした見学会等の行事もぜひ計画することを薦める。 ● 研究のためというより、現在は市民公開講座などの社会貢献や、オープンキャンパスの際の大学の広報的側面が大きい、それなりに有効である。			

委員会名	遺伝子実験施設 管理委員会	委員名	◎ 小宮山忠純、渡邊賢一、尾崎昌宣、 安藤昌幸
① 年間の活動 評価委員による評価点 (3、3、3) [コメント] ● 順調に推移したとのことであり特に問題は無い。 ● 研究倫理的な側面を等閑視しないよう注意を払われたい。			

委員会名	実験動物施設 管理委員会	委員名	◎尾崎昌宣、渡邊賢一、若林広行、 佐藤真治（応用）、市川進一（応用）、 三宅紀子（応用）
① 年間の活動 評価委員による評価点 （ 4、4、3 ） 〔コメント〕 ● 新規程の作成も終了し、それに則った運営を行うが、利用者規程で受益者負担分はどのようになっているのであろうか。機器委員会等との調整が必要であらう。 ● 特になし			

委員会名	体育施設管理運営委 員会	委員名	◎高橋努、中村辰之介、高津徳行、 太田達夫（応用）、重松亨（応用）
① 年間の活動 評価委員による評価点 （ 3、3、3 ） 〔コメント〕 ● 円滑な管理運営が出来たとのことで問題は無い。問題点の提起は問題点というより、利用者がよりよく利用するための希望として理解できる。 ● 特になし			

委員会名	放射線安全管理 委員会	委員名	◎安藤昌幸、宮本昌彦、梨本正之（応用）、 新井祥生（応用）
① 年間の活動 評価委員による評価点 （ 3、4、3 ） 〔コメント〕 ● 初期の想定外の問題点が解消したのは喜ばしい重要なことである。R Iは地域住民にもっとも不安を与える要素であり、大学として慎重に取り組まなければならないものである。 ● 安全管理は正しく行われていると判断する。			

委員会名	ホームページ委員会	委員名	◎中村辰之介、米田照代（応用）、星野恵（事務）
① 年間の活動 評価委員による評価点 （ 5、5、4 ） 〔コメント〕 ● 積極的に活動している様子が伺える。昨年も記載したようにHPの充実を受験生の確保も含めて現代では必須時効になっている。アクセス回数が急速に多くなったのは素晴らしいことである。後は内容を随時更新するなどの努力を続けていけばさらに充実したものになろう。大学が「くすり」に関しての情報発信の場になれば地域にとっても大きなメリットになろう。 ● 外注によって負担が軽減し、機能が向上したと考えられる。広報委員会など他の委員会との連携を強化し、効率的な活用を期待したい。個人情報との関係は注意が必要であるが、過剰反応は却って有効性を損なう。 ● 積極的に取り組んでいるようです。			

委員会名	大学院教務 委員会	委員名	◎上野和行、宇田裕、大野智
① 年間の活動 評価委員による評価点 (3、3、3) 〔コメント〕 ● 6年制における大学院の設置基準がいよいよ示される時期になったので、その対応をする必要が出てこよう。また、今後は社会人大学院生の入学を増やす努力・方策作りも求められよう。 ● 実態とその成果がまだ見えない。			

教員および委員会からの提言(まとめ)

教員および委員会からの提言

平成19年度の自己点検・評価に記載された具体的な提言を、いくつかのテーマに集約してまとめました。

I. 「教育力」アップに関する提言

(1) 学生の「学力」アップに関する提言

- ・アクティブ・ラーニング手法を取り入れ、学生の修学モチベーションや学力の向上につなげることを考える。(杉原、高中、教務委員会)
- ・講義について十分な効果を上げるために、少人数制の導入が必要であり、それに伴う講義室及び教員の確保が必要である。(尾崎)
- ・学力に応じたクラス再編成を進級時に学年ごとに行う。(一柳)
- ・学年別教科担当者による意見交換会を通じて学生の学力に関する全体としての認識を共有することが大事である。(宇田)
- ・講義回数を減らすよりも、余裕をもった講義が行えるような講義回数の確保(12回 or 14回)をするべきである。(宇田、白崎)
- ・講義内容の重複やコアカリ内容の欠落などが見受けられるように思われるので、各系での教科担当者の協議・調整をもっと行う必要がある。(影向、福原)
- ・小テストやPCによる自習システムの導入を図るべきである。(佐藤、教務委員会)
- ・過密すぎる授業コマ数と方略の見直しを含めたカリキュラム改正を検討し始める時期になってきている。(教務委員会)
- ・学力向上に関する施策を含め、薬学教育研究センターがもっと主体性を発揮しなければいけない。従来の薬剤師国家試験支援のみならず、本来の業務の一環と思われる中長期的な展望を含めた薬学教育の再検討や効果的な教育手法の開発・研究に、センターがかかわるべきである。(高津、薬学教育研究センター)
- ・教育改善に向けたプロジェクトがいくつか採択されたが、今後は単発のプロジェクトに終わることのないように、原資の確保を含めた計画的な戦略を考える場が必要である。(北川)

(2) 教員の「教育力」アップに関する提言

- ・FD用のプレゼンテーションだけでなく、正規の授業を教員相互で聴講することを制度化すべきである。(中村、皆川)
- ・教員が自分の授業をより良いものとするよう努力する必要がある。(武久)
- ・講義の評価にCS (Customer Satisfaction) 分析を利用し、講義の全体評価に及ぼす種々の項目のうち、どれから改善する必要があるのか、個人の中で客観的に

判断し、講義の改善に役立てる。(鍋倉)

- ・地祇に示すような取組みで、組織的なFD活動の充実を図る。(自己点検。評価委員会)

① 学部としての教育理念・教育目標の明確化. ② FDワークショップの開催.
③ 教員の意識調査や意見交換会. ④ 学内外の授業参観. ⑤ 授業評価・外部評価・内部評価に基づいた優秀教職員の報奨制度.

II. 学生支援体制に関する提言

- ・かなりタフなカリキュラムをこなす上で精神論ではついていけない学生が増えている。学業面、資金面、精神面で学生をケアできる支援体制を構築すべきである。

(本澤)

- ・今まで以上に多種多様な学生が入学してくる。それに対する大学側の体制作りを準備する必要がある。(高橋)

① 身体面、精神面からの支援体制の充実. ② 学費、生活費など経済面からの支援体制の充実. ③ 奨学金、学費免除などの制度の充実. ④ 学業面での支援体制の充実. ⑤ 生活面での支援体制の充実. ⑥ 留学生、編入生の支援体制の充実. ⑦ 応接室(面接室)の設置. ⑧ 厚生施設の充実(自習室、学生食堂、放送施設、駐車場・駐輪場、グラウンドのナイター設備、体育館の冷暖房設備など)

- ・昨年度制定した本学駐車規定を運用していくことで、駐車環境の改善を図る(学生委員会)

- ・大学周辺道路への街灯の設置を実現していく。(学生委員会)

- ・学生食堂や購買部と交渉して、メニューや販売商品の増加を実現する。同時に弁当販売や学内自販機の増加も検討する。(学生委員会)

III. 「研究力」アップに関する提言

- ・若手の教員にとって海外留学などの機会を持つことは極めて困難な状況になってきている。若い優秀な研究者をいかに育てるか、真剣に検討する時期に来ている。

(宇田)

- ・若手の教員にとって、教育や委員会活動への負担が大きく、研究に専念する環境がなかなか整わない。ポスドクや研究・教育支援のスタッフを研究室負担なしで雇用できるようなシステムを考えられないか。(北川)

- ・本学薬学部として特徴のある研究成果をあげるためには、特化した研究体制の構築(研究時間、人的・物的資源の集中導入)が必要である。(若林、酒巻)

- ・研究内容・業績を広く社会に公表すべきであり、少なくとも研究業績の記載をHPにアップすることを徹底するべきである。(上野)

- ・若手の研究の向上に関して、定期的な学内発表会を開催するか、研究助成を図るなどの方策で大学全体の研究に対する意識向上を考えるべきである。(上野)
- ・個性的な研究を進める上で、学内研究助成の傾斜配分を増大することも考慮してはどうか。(杉原)
- ・6年制になり卒論も質の向上が求められる。教員の負担が増えることが懸念されるが、負担を可能性に置き換え、一段階テンションをあげて教育・研究に取り組むべきだ。(星名)

IV. 学生・教職員の日常生活に関する提言

- ・挨拶・マナーの向上について、教職員が率先して学生の規範になればいけない。(皆川、高津、中村、藤原、田辺ほか)
- ・学生の通学における交通マナーを良くする啓発活動や地域住民との良好な関係を築くべく働きかけが必要である。(高津)
- ・学生の日常的な態度の悪さを改善するために、キャンパス環境改善委員会の設置を提言する。(高津)
- ・学生、教職員の気持ちが明るくなるように、もっとキャンパスの周辺に花を植えるなどキャンパスの美化を考える。(北川)

V. 入試、広報などに関する提言

- ・薬学に適性をもった学生を入学させる一つの策として、高大連携をもっと活用することを考えてはどうか。(杉原)
- ・現在の入学定員が本当に適正なものかを真剣に考える時期に来ている。(北川)
- ・出張講義や高校生の本学の行事への参加など、高校との連携を深めて高校生に本学の魅力をアピールする必要がある。(尾崎、広報委員会)
- ・受験生に対して明るい薬剤師の未来と薬学部の未来をきっちりと提示する必要がある。(中村)

VI. その他の提言

- ・大学全体を見渡し、効率化することで作業を軽減できるのであれば抜本的に改革し、人材不足であるのならば正しい補強をすべきである。(酒巻)
- ・臨床教員の数的な充実、臨床研修ができるような施設の確保等、臨床実習に関わる環境の充実を願う。(若林、河野、影向、朝倉ほか)